

二人の関西系貿易人 —金子直吉と安宅弥吉—

中
川
清

目次

- はじめに
- 1 金子直吉
- (i) カリスマ性
 - (ii) 砂糖商としての出発
 - (iii) 大里製糖所
 - (iv) 第一次世界大戦前後
 - (v) 鈴木商店の倒産
 - (vi) 毀譽褒貶
 - (vii) 晩年
- 2 安宅弥吉
- (i) 安宅弥吉が作った会社
 - (ii) 鈴木大拙との交遊
 - (iii) 安宅商会の設立
 - (iv) 辰丸事件
 - (v) 日本精糖との取引
 - (vi) 大日本精糖債権者会議
 - (vii) 金子直吉の好意
 - (viii) 大正期における安宅商会の発展
 - (ix) 悲劇の予感
- 終わりに

はじめに

鈴木直吉は、明治・大正期の代表的な貿易人である。大正初期の鈴木商店は三井物産を追い越す強大な貿易商社に発展していたが、金子直吉の積極策によるものである。その鈴木商店は、昭和二年（一九二七）の金融恐慌に直面して倒産してしまった。金子直吉の積極経営が裏目に出たと言えるだろう。

一方、安宅弥吉は、安宅商会（のちに安宅産業株式会社）の設立者であるが、金子直吉とともに関西系貿易人の代表的存在であった。砂糖商として出発した安宅弥吉は、明治末期の大日本精糖債権者会議において金子直吉と接点を持っている。

大阪商業会議所会頭を経て昭和十一年（一九三六）に日本商工会議所副会頭に就任、昭和十四年（一九三九）には貴族院議員に勅選された安宅弥吉であるが、鈴木大拙あるいは西田幾太郎に対する終生変わることのなかった援助は良く知られている。

ところで、倒産した鈴木商店はやがて日商株式会社として再生しているが、現在の日商岩井株式会社である。一方、安宅産業は一九七六年に経営危機が表面化し、翌年に伊藤忠商事に吸収合併されている。「堅実」を第一とする安宅弥吉の遺訓から逸脱していった安宅産業は、七〇年の歴史のうちに消滅した。

1 金子直吉

(i) カリスマ性

城山三郎『兎』(文藝春秋社 昭和四十一年)は、金子直吉を主人公にした経済小説であるが、文庫本に収められて今も書店に並んでいる。ここに描かれている金子直吉は、余りにも好ましい経済人でありすぎるように思われる。確かに、物質的には無欲に近く、ただ事業の拡大に専念する実業家として登場する金子直吉は、そのカリスマ性までもが好ましく思われる。しかしながら、急速に発展した鈴木商店を、たちまちのうちに潰してしまったのは、金子直吉の積極策の結果である。

(ii) 砂糖商としての出発

金子直吉は、慶応二年(一八六六)に土佐で生まれている。生家が没落していたため小学校にも行かず、十一歳の時に紙屑拾いを始め、十二歳で砂糖商に丁稚奉行している。その翌年に質屋へ奉公先を替えているが、同店は明治十六年に砂糖商に商売替えしている。そして明治十九年、二十一歳の金子直吉は神戸に出て鈴木商店に入店した。

鈴木商店の創業者である初代鈴木岩次郎は、天保八年(一八三七)頃、川越藩の下級武士の次男として生まれた。

貧困の中に育った岩次郎は、江戸に出て菓子屋に勤め、やがて長崎に移って菓子職人の修業を積んでいる。

一方、大阪の砂糖商辰己屋恒七こと松原恒七は、慶応三年（一八六七）に開港された神戸の将来性に着目して神戸店を開設した。そして、菓子職人として砂糖の鑑識眼に秀れていた鈴木岩次郎が辰己屋神戸店に雇われ、やがて同店の番頭となったのは明治七年頃とされている。

その頃、病に倒れた辰己屋松原恒七は、大阪店を女婿の藤田助七に、神戸店を鈴木岩次郎に譲ることにした。こうして、神戸辰己屋（カネタツ）鈴木商店が誕生したが、洋糖取引商と言われる洋糖の輸入商として発展していった。

明治二年頃から、香港を集散地とする洋糖が神戸に輸入されているが、ジャーディン・マセソン商会（華名「怡和洋行」）とバターワールド・スワイヤー商会（華名「太沽洋行」）の有力英国商社二社に取扱いは集中していた。樋口弘『日本糖業史』（内外経済社 昭和三十一年）によれば、ジャーディン・マセソン糖（中華火車糖局糖）が最初に大阪市場に現れたのは、明治七、八年頃とされており、これを神戸の糖商鈴木岩次郎及び、大阪の糖商藤田助七らが買い取ったと記されている。

洋糖商として知られるようになった鈴木商店は両替商を兼ね、更には灯火用の石油を取扱うなど取扱商品を拡げていった。一方、店主の鈴木岩次郎は、明治十七年に神戸貿易会議所副頭取に就任している。この頃から地元経済界で重きをなすようになっていた岩次郎は、明治十九年には資産三万円以上の「神戸有力八大貿易商」の一人に数えられるようになった。更に、明治二十四年には神戸商業会議所第一期議員に選出されている。

こうして、新興商人として確固たる地位を築きつつあった鈴木商店に入った金子直吉は、厳しい商人教育を受けることになる。彼が担当した仕事は、砂糖、鯉節、茶、肥料などの国内取引であった。

明治二十七年、初代鈴木岩次郎は他界している。このため、金子直吉は、同僚の番頭柳田富士松とともに未亡人のよねを助けて鈴木商店を経営することになった。

金子直吉が実質的に鈴木商店の経営をまかされるようになったのは、日清戦争勃発間もない頃である。そして、戦後に日本が領有することになった台湾では、第四代総督児玉源太郎と初代民政長官後藤新平によって、明治三十一年に民政統治時代が始まっている。後藤新平に接近していった金子直吉は、台湾樟脳油の六五パーセントを占める販売権を取得しているが、これによって鈴木商店は大きく飛躍することになった。

なお、多くの類書では、台湾における「樟脳の取扱い」が、鈴木商店の発展に大きく寄与することになったと記している。しかしながら、金子直吉は、競合者が多い製脳事業に固執するよりも、副産物である「樟脳油」の一手販売権に着目した。そして、挂芳男『総合商社の源流 鈴木商店』（日本経済新聞社 昭和五十二年）は、「他業者と同じ経済状況に直面しながら、そこから自己に有利な独特の企業者の機会を創り出す、金子の非凡な事業家としてのひらめきがあった」と指摘している。

明治三十五年、鈴木商店は資本金五〇万円の合名会社に改組しているが、営業目的は砂糖・樟脳等各種商品の輸出入販売などである。代表社員は鈴木よね（出資額四八万巴）、出資社員は金子直吉と柳田富士松（出資額各二万巴）である。

(iii) 大里製糖所

金子直吉を事実上の最高経営者とする鈴木商店は、明治三十六年に住友樟脳製造所を買収して樟脳精製事業に進出

している。同じ年、門司市に近い大里に製糖工場を設置して精製業にも進出するが、この年は鈴木商店が生産部門への進出と多角化志向を開始した時期である。製糖工場としては我が国最初の臨海工場となった大里製糖所は、明治三十九年に株式会社社に改組されているが、当初の資本金は、鈴木商店が三分の二、大阪辰巳屋（藤田助七）が三分の一を出資していた。

イギリスから製糖機械を導入し、日産二百トンの能力で生産を開始したが、生産設備の欠陥と技術が未熟であったため不良製品が続出した。

窮状を打開するため外国人技術者の雇用を考えていたところ、大阪に本社を置く日本精糖を退社した工員の技術指導によって、完全な製糖を生産できるようになった。日本精糖については、同社役員の不二樹熊次郎は何かと悪評がつきまといっていた人物であった。前述のように、日本精糖に勤めていた工員によって大里製糖所の苦境は救われたが、この工員も不二樹専務に対して烈しい反感を抱いていたと伝えられる。

大里製糖所の立地条件は良好で、石炭と淡水に恵まれていた。また、臨港工場として門司港に接しているため、大型船が工場横に接岸可能であったため、ジャワ糖の輸入及び、製品の中国輸出には極めて有利であった。

やがて生産が軌道に乗ると生産能力は日産四百トンに倍増されるとともに、大里製糖所のブランド「ダイヤ印」は市場で名声を得るようになった。このため、当時の最大手製糖業者である大日本製糖を圧迫することになったが、同社は精製糖の製造及び販売部門の独占体制を確立するべく大里製糖所の合併を図った。

当初は大日本製糖の合併提案に同意しなかった金子直吉であるが、やがて買収に応じることにした。この結果、総投資額二五〇万円の大里製糖所を六五〇万円（現金二五〇万円、償還期限四カ年無担保社債四〇〇万円）で売却した。同

時に、北海道、九州、山陽、山陰、朝鮮の各地域における日糖（大日本製糖）製品の一手販売権を取得したが、明治四十年のことである。

それから二年後の明治四十二年には、いわゆる日糖事件が発生し、大日本製糖社長酒匂常明が引責自殺している。後任社長に就任するよう同社相談役澁沢栄一から懇請された金子直吉は、これを固辞している。この辺の事情については、次の「安宅弥吉」の項で、詳しく触れることにしたい。

ところで、明治三十八年に神戸の東端に小林製鋼所が建設されているが、鈴木商店は設備購入費及び工場建設資金として総額五五万円を融資していた。しかしながら、初出鋼に失敗した小林製鋼所では、操業開始間もない時期に身売り話を持ち上がっていた。この製鋼所の買収に余り乗り気でなかった金子直吉であるが、結局、鈴木商店の一部門として同工場を経営することになり、明治三十八年九月一日に神戸製鋼所と改称した。

創業間もない神戸製鋼所も経営不振が続き、金子直吉は何度も工場閉鎖を考えざるを得なかった。しかしながら、前記の大里製糖所の売却代金を充当することによって、神戸製鋼所の経営不振を乗り切ることができた。先ず五〇万円をもって設備の拡充が図られたが、民間重工業に対する政府の奨励策があり、海軍から軍需資材を受注するようになった。明治四十四年には鈴木商店から分離独立し、資本金百四〇万円の株式会社神戸製鋼所となったが、鈴木商店によって全額出資されていた。

大里製糖所の設立とその後の売却は、鈴木商店の産業部門への進出並びに多角化に大いに貢献することになり、同社の発展に大きく寄与することとなった。

(iv) 第一次世界大戦前後

大里製糖所を手離した金子直吉であるが、新たに東洋製糖株式会社を設立している。明治四十二年二月、鈴木商店の金額出資により資本金五〇〇万円をもって設立された東洋製糖は、台湾に本社を置いていた。

当初は生産能力一〇〇〇トンの粗糖工場として出発したが、明治四十四年には大正製糖を、翌四十五年には斗六及び北港を、大正三年には月眉、大正十一年には鳥目の各工場を併合あるいは新設している。更に、沖縄県大東島を買収して粗糖工場を建設した東洋製糖は、やがて資本金三六二五万円（払込資本金三〇三万円）の大会社に成長したが、台湾糖業界における鈴木商店の地盤が確立されることになった（この個所は、『日糖六十五年史』昭和三十五年刊を参考にした）。

日清戦争後に我が国が領有した台湾の主要産品である砂糖及び樟脳油の取扱いによって鈴木商店の業容が拡大していったことは、既に触れている。そして、植民地経営のために明治三十二年に設立された台湾銀行と鈴木商店の関係も極めて緊密になった。のちに昭和二年の金融恐慌に際して、鈴木商店の倒産、台湾銀行の休業という連鎖反応を引き起こすことになった。

ところで、大正三年（一九一四）に勃発した第一次世界大戦は、我が国経済に未曾有の好景気をもたらしたが、鈴木商店にとっても一大飛躍の商機であった。この時、金子直吉は「三井三菱を圧倒するか、然らざるも彼等と並んで天下を三分するか、これ鈴木商店全員の理想とする所也」と壮大な所信を記した書簡を当時のロンドン支店長高畑誠一に書き送っている。

高畑誠一は、のちに日商株式会社（現在の日商岩井株式会社の前身）の社長及び会長を歴任しているが、昭和四十七年十月に「私の履歴書」を日本経済新聞に連載している（のちに『私の履歴書 経済人 十五』昭和五十六年に収録）。同書の記述によれば、金子直吉の「この手紙は鈴木商店の関係者の間では『天下三分の宣言書』と名付けられ、「実に巻き紙の長さ二十一尺（約六・三メートル）におよぶ」ものである。

高畑誠一が、「今でも家宝として大切に持っている」この書簡に接した「当時の鈴木店の社員は、この金子さんの大号令にまるで魔術にでもかかったように勇氣付けられて突撃した」。

確かに、戦時景気を謳歌していた大正六年当時の鈴木商店の年商は一五億四〇〇〇万円に達しており、三井物産の年商は一〇億九五〇〇万円を遙かに上廻っていた。

戦時景気を満喫した鈴木商店は、大正八年九月頃から戦時中を上廻る好況を満喫していた。翌九年三月には、戦後第一次反動恐慌が発生しているが、この年、合名会社鈴木商店は、百倍増資によって資本金五〇〇〇万円となっている。株主構成は、代表社員鈴木よね（出資額二〇〇〇万円）、出資社員として二代目岩次郎（二五〇〇万円）、岩蔵（二〇〇万円）、金子直吉（二五〇万円）、柳田富士松（二五〇万円）である（桂芳男『総合商社の源流 鈴木商店』）。

戦後の鈴木商店に巨額の利益をもたらしたのは、ヨーロッパへの食糧輸出、米国の援助に基づくドイツへの食糧供給そして、ジャワその他世界各地で買付けた砂糖取引によるものである。そして、鈴木商店の主要取扱商品である砂糖を早くから担当していたのは、もう一人の番頭柳田富士松である。『柳田富士松傳』（金子・柳田両翁頌徳会刊 昭和二十五年）には、この辺の事情について次のように記されている。

第一次大戦後の欧州では、「砂糖の欠乏から糖価が暴騰した時に、鈴木（商店）は大量の手持ちがあった。それは

柳田、金子両翁は予め砂糖は必ず暴騰する、縦会(たとえ)戦争が済んでも永い間の耐乏生活の反動として食料品殊に調味料として必須の砂糖は暴騰することを予想し、ロンドン、ジャワ、台湾の各地で「大いに買占め」たうえ、「欧州は勿論、之を本家本元のアメリカに迄積んで世界を股にかけて売り捌いた。大正九年三月頃諸物価は大暴落を告げたが、砂糖は暴騰に暴騰を重ね、大いに儲かったのである」。

更に、前出の高畑誠一「私の履歴書」によれば、第一次世界大戦が終結した大正七年(一九一八)十一月十一日のロンドンで、「ヨーロッパでは大変な砂糖不足になっている」ことを、「世界的な砂糖ブローカーのザーニコ社のある重役」から聞き及んだ。

早速、船二隻分、約一万四〇〇〇トンの砂糖を買付けたが、「砂糖相場は(中略)、第一次大戦後二年近く暴騰を続け、ピークは十倍近くまで上がった。この間、私が(ロンドンにおいて)引用者)扱った砂糖はざっと五十隻ぐらいのぼり、もうけは当時の金で五〇万ポンド(一ポンド二〇円)にもなった」。

こうして、世界各地で大量に砂糖を買付けた鈴木木商店は、タイミング良く巧みに売り捌いている。ちなみに、第一次世界大戦後の砂糖の国際価格は、大正九年(一九二〇)五月十五日のニューヨーク市場でポンド当り二二・五セントという最高値をつけている。ところが、その二ヵ月前の三月十五日には、東京の株式相場は大暴騰で始まっており、その翌日から二日間にわたって東京証券取引所は休業に追い込まれている。米国における恐慌に先行して、我が国における戦後恐慌の始まりである。

砂糖の国際価格も、その年十二月には三・六セントまで暴落し、更に翌年(一九二二)には一・八セントという最安値を記録している。こうして、大正九年九月には増田貿易が、その翌年には安部幸兵衛商店など横浜の有力砂糖商

が相次いで休業の止むなきに至っている。また、同じ頃、神戸の有力砂糖商の湯浅商店も経営に破綻を来している。

(v) 鈴木商店の倒産

砂糖商として出発した鈴木商店であるが、第一次世界大戦後も砂糖によって巨額の利益を得ることができた。しかしながら、それから七年を経た昭和二年(一九二七)の金融恐慌の中で、あえなく崩壊してしまった。

糖業界の生産部門及び流通部門に大きな影響力を發揮していた鈴木商店の倒産は、同時に糖業界の再編成をもたらすことになった。

鈴木商店によって東洋製糖が設立されたことは前述の通りであるが、同社は昭和二年七月に大日本製糖によって吸収合併された。鈴木商店が倒産して三ヵ月後のことである。

この吸収合併によって、大日本製糖の資本金はほぼ倍額に近い五四四二万円に達し、東洋製糖の斗六、北港、月眉、鳥目の四工場を取得した。こうして、大日本製糖の生産能力も約六四四〇トンへと倍加し、台湾における全産糖能力の二〇パーセント近くを占めるようになった。

これに先立って、東洋製糖は南靖(一〇〇〇トン)及び烏樹林(七五〇トン)の二工場を、これらに隣接して製糖工場を所有していた明治製糖株式会社に売却している。そして、この売却代金をもって、東洋製糖は鈴木商店関連の負債を弁済することができた。こうして、大日本製糖によって合併される時点における東洋製糖の債務はほぼ完済された状態にあり、合併比率は三対二となっていた(以上、前出の『日糖六十五年史』による)。

更に、鈴木商店傘下にあった塩水港製糖の旗尾及び恒春の二工場は、台湾製糖に引き取られている。

こうして、鈴木商店の倒産に伴って、同社が台湾に所有していた製糖工場は、大日本製糖、明治製糖及び台湾製糖によって引き取られた。この結果、三井系（台湾製糖）及び三菱系（明治製糖）の両財閥グループ並びに、藤山コンツェルン（大日本製糖）によって、台湾糖業の総資本金の八七パーセントが占有されることになり、事実上の寡占支配体制が確立された（桂芳男『総合商社の源流 鈴木商店』）。

大正九年に増田貿易及び安部幸兵衛商店といった明治期以来の有力糖商が相次いで消滅したことに加えて、鈴木商店の倒産によって、生産会社が糖商資本に対して優位に立つことになり、その地位は完全に逆転した。また、砂糖流通組織においても、三井物産と三菱商事が従来の糖商資本にとって代ることになり、財閥資本による支配体制が強固となった。

(vi) 毀譽褒貶きよほうへん

建前としては鈴木家の忠実な番頭であった金子直吉は、鈴木商店の経営に当っては思いのままに腕を振っていた。綺麗ごとを言えば、金銭に恬淡てんたんであったからこそ、自由な振舞いが容認されていたのだろう。しかしながら、実際には、過度の事業欲が事業家の敗北につながる事になった。

福沢論吉の婿養子となった福沢桃介は才人として知られているが、昭和四年に『財界人物我観』を刊行している。

これは、経済雑誌「ダイヤモンド」の連載記事をまとめたものだが、大正期の有名財界人一五名を対象にしており、「金子直吉」の章がある。

『財界人物我観』には、「金子は我が財界におけるナポレオンに比すべき英雄だ」と記されている。そして、「由来、実業家に婦人道徳は不向きと相場が定まっている」が、「金子はオギャーと生まれて六十三歳の今日に至るまで、女房のほかには道楽の味を知らぬという聖人である」と評されている。

金子直吉は、後藤新平、浜口雄幸といった当時の有力政治家と親交があったが、特定の政治家に金銭を供与することもなければ、政治献金に見返りを期待することもなかったと言われている。政界、官界など「要路の生神(いきがみ)様へしかるべきお賽銭を上げておくべきことを(金子は)念頭にかけなかった。それが鈴木没落の最大原因である」と、福沢桃介は記している。

更に、「碁、将棋、書画骨董の道楽が」一切無かったと福沢桃介が記している金子直吉には、時として常軌を逸した行動もあったようである。これまでに再三にわたって引用させていただいた高畑誠一の「私の履歴書」には、次の記述がある。

「金子さんは、スタイルなどおかまいなし。年中ねずみ色の服を着ており、ズボンにはめったに折り目がついていない。寒がりでも夏でも腹にカイロを抱き、一方で、頭は冷やしておかなければいけないからと、水のうをのせ、水のうが落ちないようにくしゃくしゃの中折れ帽をいつもかぶっていた」。

明治四十二年に神戸高等商業学校を卒業した高畑誠一は、同校の初代校長水島鍊也の勧めに従って鈴木商店に入社した。「前から交際があったらしい」金子直吉から、「鈴木商店の貿易部門を拡大したいから、だれか適当な卒業生を紹介してほしい」と水島校長が頼まれていたようだ(高畑誠一「私の履歴書」)。

高畑誠一は、入社三年目でロンドンに赴任しているが、金子直吉にその将来を期待されていたのだろう。大正十一

年には、鈴木商店店主の二代目鈴木岩次郎の長女千代子と結婚しているが、金子直吉の推挙によるものである。

その高畑誠一であるが、金子直吉に対して親愛の情を示しながらも、彼の経営態度には批判的であった。

「私をはじめ、当時の鈴木商店で働いていた者にとっては、超ワンマンの金子さんの存在があまりに大き過ぎたため『鈴木商店は実質的には、金子商店』といった印象の方が強かった。だから鈴木木の当主の娘と結婚したからといって鈴木商店の経営の実権が握れるとは思えなかった。事実、鈴木商店は昭和二年に倒産するまで、金子さんのワンマン体制が続いた」

と、高畑誠一「私の履歴書」に記されている。

そして、また、高畑は次のように述懐している。

「鈴木商店が急成長を遂げたのは、金子さんの万事に積極的な経営姿勢に負うところが大きい。半面『事業の鬼』といわれた金子さんも、資金調達という点では慎重な配慮に欠けていた。事業に必要な金が足りなければ、不足分は全部借金でまかなえばいいというのが金子さんの哲学だった。こうした金子さんの考え方に、私は反対だった。私だけではない。(中略)

金子さんは、得意の政治力を駆使して、台湾銀行から借りまくった。当初は鈴木木の事業の拡大に伴う前向きな借金だったが、第一次大戦後の反動不況で、鈴木木の事業が伸び悩むとともに、借金返済のための借金といった後ろ向きの借金も増えた」。

「私の履歴書」からの引用が長くなったが、事業欲旺盛と言われた金子直吉であるが、経営者としての資質に欠けるところがあったことを、高畑誠一は厳しく指摘している。

会社崩壊後も、金子直吉は鈴木商店の再興を考えていた。しかしながら、高畑誠一「私の履歴書」の記述によれば、「台湾銀行や横浜正金銀行などの大口債権者は、そうした金子さんの鈴木再建案には難色を示していたし、金子さんのカムバックそのものに反対だった」。

とはいえ、金子直吉のやや古風のカリスマ性に敬愛の念を抱いていた若手社員のなかから、数多くの人材が育っている。

先ず、鈴木商店を継承した日商株式会社及び日商岩井株式会社の社長及び会長経験者には、この稿に再三登場した高畑誠一、永井幸太郎、西川政一がいる。また、かつての鈴木商店の系列会社の経営者として、田宮嘉右衛門、浅田長平とともに神戸製鋼所社長及び会長に就任した。政界にも進出した鈴木商店出身の経済人として、大屋普三(帝人社長、大蔵・商工・運輸大臣などを歴任)、金光庸夫(衆議員副議長・厚生・拓務大臣など歴任)、竹田儀一(神鋼商事社長、厚生大臣など歴任)がいる。その他にも、鈴木商店に在籍していた数多くの人材が、関西を中心に政界人として活躍していた。

(vii) 晩年

明治三十八年(一九〇五)、金子直吉の次男として生まれた武蔵は、実業界とは全く関係なく、哲学者として大成している。西田幾太郎の娘を妻に迎えた金子武蔵は、昭和三十三年に東京大学文学部長に就任しており、東大退官後は成蹊大学文学部長を勤めている。戦前においては我が国におけるヘーゲル研究の水準を高めたと評価されており、戦

後は主としてハイデッガー、ヤスパースなど実存哲学の研究者として知られていた。

金子直蔵はまた、日本倫理学会を主宰していた。昭和四十二年（一九六七）には、『実存と倫理』（日本倫理学会論集第一集、『伝統』（同第二集）が、いずれも金子武蔵編として理想社から出版されている。

ところで、金子武蔵が翻訳したヘーゲル『精神現象学』が、岩波文庫に入っている。鈴木商店没落後の直吉が、この難解な哲学書に挑戦しようとしたが、結局投げ出してしまったというエピソードが城山三郎『胤』に紹介されている。独学ながらも金子直吉が博覧強記の人であることが知られているが、こうした資質は哲学者となった武蔵に継がれているのかもしれない。

晩年に至るまでも事業に執念を燃やしていた金子直吉は、これといった趣味を持ち合わせていなかったものの、「白胤」を号していくつかの句作を残している。昭和十九年二月、七十二歳の生涯を終えた。

2 安宅弥吉

(1) 安宅弥吉が作った会社

その崩壊に至るまでの二〇年間、筆者は安宅産業に在籍していた。筆者が入社した昭和三十二年（一九五七）当時の安宅産業は、堅実な会社として知られていたが、その前年に第一部上場企業となっている。

社内には、いわゆる「ファミリー」が形成されていた。その第一世代は、創立者安宅弥吉の故郷金沢の出身者達である。弥吉の学資援助を受けたのち安宅商会に入社した彼等は真面目な青年達であるが、安宅家に対して極めて忠実であった。

創立者の個人的恣意性が多分に支配的であった企業体質のなかで、弥吉の息子安宅英一は経営の表面に出ることはなかったが、会社崩壊に至るまで人事権を掌握していた。「ファミリー」の第二世代は、英一氏の個人的関係者の紹介によって入社した者あるいは、同氏に気に入られた社員などによって占められていた。英一氏の恣意によって人事は自由に操られ、末端に至る社員までも恐れられたが、「ファミリー」は安宅家の親衛隊的存在となっていた。

ところで、大手総合商社グループを「十大商社」と総称していた時期があった。下位ながらも、この十大商社に名を連ねていたのが安宅産業であるが、一九七七年に消滅してしまった。その後、「十大商社」に新たに一社を補充することなく、「九大商社」という呼称とともに現在に至っている。

安宅産業崩壊の過程は、当時のジャーナリズムで賑やかに取り上げられており、この経済事件を題材にしてフィクション、ノンフィクションとりまぜて二〇冊を越える単行本が出版されている。だが、この会社の存在を記憶する人は今では少なくなっている。

安宅産業の前身である安宅商会は、当時三十一歳の安宅弥吉によって明治三十七年（一九〇四）に設立されている。そして、設立間もない安宅商会は、銃器輸出にかかわる辰丸事件、そして日糖事件という二つの大事件の対応に大いに苦しむことになった。

(ii) 鈴木大拙との交遊

安宅弥吉は、明治六年（一九七三）に金沢市郊外の金石（かないわ）町に生まれている。弥吉が生涯を通じて支援を惜しまなかった鈴木大拙も、金沢の生まれである。また、近代日本の代表的な哲学者西田幾太郎も、大拙と同じ年（明治三年）に金沢の近くで生まれている。

安宅弥吉は、明治二十年に石川県専門学校初等中学科に入学している。加賀前田藩々校明倫堂を前身とする啓明学校が、明治十三年に改称されて石川県専門学校となった。四年制の初等中学科（予科）と、三年制の専門部に分かれていたが、専門部には法・文・経の三つの課程が設置されていた。

十二歳の鈴木大拙が石川県専門学校初等中学科に入学したのは、明治十五年である。明治十九年には西田幾太郎が石川県師範学校から転入してきており、留年していた鈴木大拙と同級生になっている。こうして、大拙と幾太郎の生涯にわたる交友が始まることになった。

明治十九年に公布された中学校会によって、石川県専門学校は第四区高等中学校となっている。その翌年には第四高等中学校と改称され、更に第四高等学校と名を変え、現在の金沢大学に至っている。安宅弥吉は、僅か一年間であるが、大拙及び幾太郎と同じ時期に石川県専門学校に在籍していたが、この頃、三人の共通の交友関係はまだ始まっていなかった。

明治二十二年に上京した安宅弥吉は、その頃神田一ツ橋にあった高等商業学校（現在の一橋大学）に入学している。当時の本郷西片町には、旧藩主前田侯爵家が郷土出身の学生達のために建てた寄宿舎久徴館があった。その二年後に

上京して帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)選科生となった鈴木貞次郎(大拙)も、この久徴館に入寮している。弥吉と大拙の生涯にわたる親交は、この時に始まった。

大拙の感化によるものか、安宅弥吉は明治二十五年頃から禅に関心を寄せており、参禅するようになったが、のちに自安居士の名が与えられている。二人の交友関係を通じて、大拙は弥吉に対してある種の精神的影響をもたらしているが、かといって、弥吉が禅僧の如き高潔な人生を送ったというわけではない。

第四高等学校教授として金沢に住んでいた大正十年頃の西田幾太郎は、長男の死去と三女の入院が重なって心労の多い時期であったが、一年間にわたって安宅弥吉の経済的援助を受けている。このことを心苦しく思った西田が、この好意を受けるべきかどうか、心友の大拙に相談した。

「安宅はあっちこちに妾を置いているからに、それにやるくらい金だから、遠慮なしにとっておいたらいいだろう」

と、大拙がこともなげに言い放ったというエピソードが伝わっている。

ところで、生前の鈴木大拙に宛てられたおびただしい書簡のなかで、最も数多く保存されていたのは安宅弥吉からの手紙であったと、古田紹欽は「鈴木大拙全集 月報」(岩波書店)に記している。大拙の弟子であり仏教学者として知られる古田氏は、この「月報」に「鈴木大拙からの書簡」を連載している。そして、この連載の第七回から九回迄の三回にわたって、安宅弥吉からの手紙の解説にあてられている。大拙の第一の心友といわれた西田幾太郎からの書簡の解説よりも、遥かに大きなスペースが弥吉からの書簡の解説に与えられていることになる。

『鈴木大拙全集』に収められている大拙の書簡あるいは、大拙が三十六年九月に日本経済新聞に連載した「私の履

「歴史書」の記述から弥吉に対する心からの感謝を読み取ることができる。

北鎌倉駅に近い東慶寺は「縁切り寺」として有名であるが、この寺に隣接した墓地には、文化人と言われる人々とともに著名な財界人のお墓が散在している。その一角には、大拙、幾太郎そして弥吉を加えた三人の墓がほぼ同じ場所に建てられている。更に、その近くには、和辻哲郎、野上豊一郎・弥生子夫妻、岩波茂雄といったいわゆる岩波文化人と言われた人々が静かに眠っている。生前における親交が、いつまでも続いているのを見る思いである。

また、この寺の敷地内には松カ岡宝蔵が建っており、東慶寺が所蔵するいくつもの重要文化財を見ることができ、宝蔵入口横のあまり目立たない場所には、鈴木大拙が草したやや小ぶりな「自安 頌徳碑」が建てられている。

碑には、

「(安宅弥吉) 君は安宅産業株式会社の創立者として商社経営に成功し、産業貿易会にまた政界に幾多の業績を残したことは説くまでもない」と刻まれている。禅学者として世界的に知られた鈴木大拙は、「自分が研究生活に専念し得たのも君(安宅弥吉——引用者)の行為によるところ大であった」こと、また、大拙が数多く出版した英文の著者も「ひとえに、君の精神的物質的支援のためものである」と、この碑に記している。

更に続けて、

「君が育英事業に力を尽くし、多数の人材を養成したこともまた周知の事実である。安宅産業株式会社の今日あるを見て君がいかに人材の育成に心を砕いたかの一面を知ることができる」という文章で終わっている。

生涯を通じて変わることのなかった安宅弥吉の支援に対する鈴木大拙の心からの謝辞が連ねられたこの頌徳碑には、昭和四十一年六月と記されている。それから一一年後に、安宅産業は消滅している。

(iii) 安宅商会の設立

安宅弥吉は、明治二十八年七月に高等商業学校を卒業をしている。明治三十五年(1902)に神戸高等商業学校が設置されたため東京高等商業学校と改称するまで、我が国唯一の高等商業学校であった。

十六歳の弥吉が、「我国貿易界の偉人錢屋五兵衛氏の伝記を読んで発奮し、貿易を以て身を立てんと遂に意を決して」高等商業学校に入学したことが、昭和二十年に私家版として刊行された安宅弥吉「備忘録 一」(全三七六頁)の冒頭に記されている。

早くから貿易商を志していた弥吉は、三井物産会社への入社を希望したが、望みはかなわなかった。そのため、三ヶ月間ほど日本海陸保険会社に在籍していたが、その年(明治二十八年)十月には、大阪の貿易商日下部商店に移っている。

日下部商店の創立者日下部平治郎は、既に明治三年に香港へ渡っており、その後も毎年のように香港と大阪の間を往復していた。当時の外国貿易は横浜、神戸などの外国人居留地に進出していた外国商館経由の取引が主流となっていた。早くから海外との直接貿易を手がけていた日下部は、先駆者的存在である。

日下部商店は、明治五年には日森(ヤッサム)洋行の名称をもって香港に支店を開設していた。そして、入社間もない安宅弥吉は、日森洋行の支配人として香港に赴任することになった。その頃、日下部商店で取扱っていた主要商品は、砂糖と雑貨類であった。

明治前半期の我が国では、「香港車糖」と称されていた洋糖が盛んに取引されていた。「車糖」とは、機械制工場に

よって生産された精製糖全般を意味しており、香港が取引の中心地となっていた。明治二十八年に安宅弥吉が赴任していった頃の香港は、東洋における砂糖の集散地としての地位は既に低下していた。とはいえ、弥吉が砂糖取引の知識と経験を身につけるには十分な土地柄であった。

ところで、『日本の下層社会』（岩波文庫に所収）の著者として知られる横浜源之助は、雑誌「商工世界太平洋」第九卷一号（明治四十三年）に「海外貿易者」を執筆している（のちに『明治富豪史』として世界思想社刊行の〈教養文庫〉所収）。そして、

「試（こころみ）に貿易に關係ある顔振（かおぶれ）を見るに、北米貿易には森村市左衛門あり」に始まる一節で、当時の有力貿易商を列挙しているが、「香港に日森洋行あり」と記している。

また樋口弘『日本糖業史』（内外経済社 昭和三十一年）に、「香港集散裾物糖の輸入」の項がある。そして、明治二十八、九年頃、大阪、神戸の糖商によって結成された直輸合資会社が、

「香港にあつて松本重太郎の経営する日森洋行の手から、直輸入の途を講ずる事として、連絡社員をも派している」と記されている。

松本重太郎は、明治三十年代前後の大阪経済界における有力者である。明治三十年、松本重太郎、不二樹熊次郎、野田吉兵衛ら大阪の実業家が発起人となって日本精糖株式会社が発立されている。資本金一〇〇万円のこの会社は、工場を大阪市内の都島に設置しており、翌三十一年下半年頃から同社製品が市場に出廻っている。のちにこの会社は、日本精製糖株式会社と合併して大日本製糖株式会社となった。

日本精糖株式会社設立の中心人物となった松本重太郎は、日本紡織、第百三十銀行など大阪有力企業の大株主であ

り、経営者であったが、彼の個人持株会社として松本商店が存在していた。

ところで、前出の樋口弘『日本糖業史』には、「香港にあつて松本重太郎の経営する日森洋行」とあるが、実際に松本が日森洋行を経営していたわけではない。松本重太郎と日下部商店の関係は、どちらかと言えば個人的な関係によつてつながっていたが、松本商店から日下部商店への融資が実行されていた。また、松本商店で会計見習いとして勤務していた金田林蔵が、日下部家の娘婿として養子に入つており、松本重太郎がその後見人となつていた。

明治三十二年、店主日下部平次郎の死去に伴い、女婿の日下部林蔵が二代目店主となった。翌三十三年二代目店主の香港来訪を機会に、安宅弥吉は退店して帰国している。この時、若い林蔵と弥吉の間に、今後の経営方針を巡つて意見の衝突があつたと伝えられている。

しかしながら、松本重太郎の強い懇請があり、弥吉は再び同店に復帰することになった。そして、松本・日下部・安宅三者話合ひの結果、日下部商店は大阪本店部と香港部に二分され、香港部の経営は日下部と安宅弥吉の組合組織となった。香港店の経営は安宅弥吉に任されたが、従来からの商号である「日森洋行」が使用された。こうして安宅弥吉は、これまでの主従関係を脱して、共同経営者となった(以上は『安宅産業六十年史』昭和四十三年刊による)。

昭和三十四年六月、安宅弥吉は香港において日森洋行の経営を開始し、事業は順調に発展していった。しかしながら、それから三年後に勃発した日露戦争の開戦当時は、戦争の先行きに不安を抱いた経済界は大きく動揺した。株価の大暴落に始まつた不況の到来とともに、手広く事業を展開していた松本重太郎も大きな打撃を蒙ることになった。

まず、松本重太郎が頭取を務めていた第百三十銀行が、明治三十七年六月に閉鎖している。これに伴つて、松本重太郎の持株会社であつた松本商店の経営が行き詰まり、同店と密接な関係にあつた日下部商店大阪本店も閉店の止む

なきに至っている。

突然の苦境に遭遇した安宅弥吉は、この機会に独立を決意した。こうして、明治三十七年七月一日、安宅商會が開業した。本店所在地は大阪とし、香港支店を設置したが、従来からの商号「日森洋行」を引続いて使用することにした。創業当初の安宅商會の従業員は、本店に六名、香港支店三名の他に、両店にそれぞれ「ボンさん」と呼ばれていた少年店員一、二名程度が働いていた。

その頃の安宅商會の取扱商品は、コメ、砂糖、石炭のほか雜貨類であるが、明治末期における日本の貿易商社の標準的な商品構成となっていた。やがて、ソーダ灰の輸入など取扱商品の枠が拡がり、明治四十年に東京出張所が開設されている。

明治四十年前後の時期に香港に進出していた日本企業について、前出の横山源之助『明治富豪史』は次のように記している。

「近時香港の繁旺（はんおう）は悄悄退色を示して来たのは事実で、従って我が貿易者の顔振も極めて寡（すくな）い。まず指を折れば、三井物産会社支店に、大阪高麗橋の安宅商會を本店とせる日森洋行である。同洋行は、明治五六年の交（ころ）、香港貿易に機先を制した日下部某の事業を継承したもの。行主（こうしゅ）は安宅弥吉、高等商業学校出身の壯年である。」

明治四十二年には、安宅商會大連出張所が開設されている。同じく前出の『明治富豪史』の「海外貿易者」の項には、次の記述がある。

「大連または、營口で、重（おも）なる貿易業者といえば、大抵大豆及（および）豆粕を扱っている。まず大連で

は、三井洋行、小寺洋行(宮口は本店、神戸及び大連は支店)、安宅商会(中略)湯浅洋行、大倉公司、野沢洋行などは、重(お)もなる顔振れ。(中略)安宅商会及び野沢洋行も、亦(また)商品の取引多しといわれている。

こうして事業を拡大していった安宅商会であるが、やがて、この若い商社の存続を揺るがすような二つの事件に遭遇することになる。明治四十一年二月に発生した「辰丸事件」と、翌年七月の「日糖事件」である。

(Ⅳ) 辰丸事件

一九一一年(明治四十四年)の辛亥革命に至る革命運動の進展に、当時の日本は、さまざまなかかりを持っていてた。その一つに、清国政府あるいは革命軍への日本からの武器供与がある。こうした状況の中で、設立後五年目に入ろうとしていた安宅商会は、中国への銃器輸出に端を発した国際事件にまきこまれることになった。

一九〇七年(明治四十年)五月から翌年四月にかけて、華南の各地では六回にわたって連続的に革命勢力の武力蜂起が発生していた。こうした状況のなかで、明治四十一年二月、銃器類を積んでいた第二辰丸が、マカオ沖で清国海軍に拿捕されている。第二辰丸の船主は兵庫県西宮市の辰馬商会であり、積荷の荷主は安宅商会と日清貿易商会である。

日清貿易商会の積荷は、海産物及び石炭など当時の中国向けの一般的な輸出商品であるが、安宅商会の積荷は中古銃一五〇挺と弾薬四万発である。ポルトガル領マカオの銃器弾薬商店の注文によって、安宅商会が神戸の銃砲商業谷商会から買付けた旧式の銃砲は、陸軍造兵廠の払下げ品である。その頃の日本では、貿易商社が武器類の輸出

を取扱うのは決して珍しいことではなかった。

マカオ沖に到着した第二辰丸は、沖合にあって入港を待っていた。その時、清国の巡洋艦と砲艦三隻が接近し、兵器類密輸入の嫌疑により第二辰丸を拿補した。そして、この貨物船が掲揚していた日章旗を引き降ろし、代りに清国旗を掲げて清国領土内に拉致した。清国側は、これらの銃器類が革命軍の手に渡るものと考えていた。たとえその判断が誤解であるとしても、当時の革命運動を考えると無理からぬ状況であった。

上記の清国側の措置に対して、日本国政府は強硬に抗議した。積荷の銃器弾薬が密輸品でなく、日本国内の正式な輸出手続を終えており、マカオ政庁の輸入許可を取得していること、更には清国の領海外において検問され、拿補されたことが抗議の根拠となっていた。また、第二辰丸に掲揚されていた日章旗を引き降ろしたことは国家に対する重大なる侮辱であることを指摘し、日本国政府は第二辰丸の即時解放並びに、清国政府の謝罪と損害賠償を要求した。

一方の清国政府は、日本側の要求を拒絶し、解決の糸口が見つかからないままに事態は緊迫していった。翌三月に入って、これ以上解決が長引くようであれば軍事行動をも辞さないという脅迫的な通達が、北京駐劄の林董（はやし・ただす）公使から清国外務部尚書（外務大臣）袁世凱に手渡された。更に、日本政府の強硬な態度を示威するために、巡洋艦和泉を現地に急航させるとともに、中国大陸に派遣させるべく第二艦隊を佐世保に待機させることにした。

緊迫した状況の中で、三月十五日に至って清国政府は拿補船の解放、責任者の処罰、賠償金の支払、日本国政府への謝罪など日本側の要求を全面的に受諾することになった。こうして事件は解決したものの、日本国政府の強圧的な要求に対する清国側の屈服を激しく非難する反政府運動が、中国民衆の間に広がっていった。

この非難行動は、清朝政府打倒の気運と結びつくとともに、第二辰丸が解放された三月十九日をもって国辱記念日

と称されるようになった。やがて、日貨排斥運動へと発展していった反日の気運は、華南から華中へと浸透していった。こうして辰丸事件によって引起された混乱は、その年の終わりまで続くことになった。

この時の抗日運動は、我が国の中国大陸進出に対して、その後も何度となく繰返された日貨ボイコット運動の始まりであった。開業間もない小さな貿易商社が、近代日中関係史のなかで、はからずも不運な役割を果したのが、辰丸事件である。

ともあれ、思いがけなく国際的な拡がりを見せることになったこの事件は、まだ規模の小さな貿易商社にとって、とんでもない災難だった。四〇日間にわたって連日のように新聞紙上を賑わす事件であったため、安宅商会の先行きに不安を抱き、やがては倒産するのではないかと懸念する取引先も少なくなかった。ある在日外国商館が、期日迄まだ一ヵ月以上もある手形を直ちに決済するよう要求していたのも、止むを得ない状況であった。

こうして、資金の手当や信用回復のため、若き経営者安宅弥吉は日夜奔走しなければならなかった。幸いにして、横浜正金銀行やその他の関係者の好意と理解を得て、安宅弥吉はこの大事件を乗り切ることができた。

しかしながら、それから一年後には、「日糖事件」とそれに続く債権者会議で、再び苦境に立たされることになった。ところで、明治期における武器輸出商社として三井物産、大倉組(のちに大倉商事)、高田商会の三社が有力であった。明治四十一年(一九〇八)に、これらの三社は陸軍大臣の指導の下に泰平組合を結成しているが、これによって武器輸出の寡占体制が確立された。泰平組合のアウトサイダーとなった他商社は、やがて武器輸出から離れてゆくことになった。

(V) 日本精糖との取引

明治期糖業史における安宅弥吉について触れるため、時間を逆行することになるが、再び日森洋行時代の弥吉について記したい。

前述のように、大阪及び神戸の主だった砂糖商は、香港糖を直接輸入するべく直輸入するべく直輸入会社設立された。香港に派遣された同社の調査員は、現地進出日本商社の草分け的存在である日森洋行に身を寄せた。日森洋行が調査に協力したこともあって、香港糖の買付が一手に託された。こうして、日森洋行は一・二パーセントの手数を得て、明治二十八年十二月から香港糖の買付を開始した。

明治三十四年夏、日森洋行の協同経営者となった安宅弥吉は、満船積原料糖買付による大口取引の機会を窺っていた。このため、既に知己を得ていた松本重太郎が社長に就任していた日本精糖が買付けていたジャワ糖輸入に参入しようと考えた。

当時の日本精糖は、三井物産、イリス商会及びラスペー商会を経由してジャワ糖を仕入れていた。明治三十四年頃、安宅弥吉は日本精糖の囑託としてジャワへと出張した。その目的は、現地最大の華商である建源(キャンガン)号と取引を開始することであった。弥吉は、建源号の当主黄仲函(ウイチヨンハム)の邸を訪れ、あるいはシンガポールから香港までの航海に同行して、熱心に取引の開始を懇請した。

たまたま、黄仲函が訪米の途中に日本に立寄ることになったので、急拠先発して帰国した安宅弥吉は、日本精糖社長松本重太郎及び同社支配人不二樹熊次郎と建源号の当主である黄仲函との会見を実現した。

多大な努力を払った安宅弥吉は、日本精糖会社向けのジャワ糖一隻分（価額約三〇万円）の委任買付に成功した。この第一船の取引によって、諸経費を差引いて約六〇〇〇円の利益が得られたと『安宅産業六十五年史』は記している。その後も、安宅弥吉は満船契約による原糖の大量買付を継続した。ジャワにあったオランダ・ドイツ共同経営のウエレンスタイン・クローズ商会や、ロンドンにあって世界的に有名な砂糖商ザニコー商会との取引に成功した安宅弥吉は、砂糖業界において着々と実績を積み重ねていった。

「安宅弥吉は（日森洋行）香港部時代から安宅商会独立経営の初期にわたって、数度ジャワ方面に出張し砂糖取引の辛酸をつぶさになめつつ長くこの業務を主宰して努力を続けた」と、前出の『安宅産業六十年史』に記されている。

また、香港から独占的に輸入していた白ザラメ糖の極上品「五温」（ゴアン）に安宅商会の英語名略号 A. C.（エーシー）をつけて「エーシー五温」と称していたが、当時の我が国精糖市場では名の通ったブランドとなっていた。まだ小規模な貿易商であった安宅商会は、砂糖輸入商として知られるようになっていた。

(vi) 大日本製糖債権者会議

我が国有数の製糖会社であった大日本製糖株式会社が直面した経営危機に続いて、いわゆる「日糖事件」が表面化した。そして、砂糖を主力取扱商品の一つにして順調に発展してゆくかと思われた安宅商会は、明治四十二年に発生した「日糖事件」に関連した経済事件の対応に迫られることになった。

大阪に本社を置いていた日本精糖時代から引続いて、安宅商会は大日本製糖とも取引関係があった。安宅商会は、大日本製糖に納入したジャワ糖一隻分の代金三六万円に対して明治四十二年一月二十一日期日の約束手形を受取っていたが、手形の支払は不能となった。当時の三六万円は言うまでもなく大金であり、横浜正金銀行への支払に充当される予定であった。

その頃更に不運が重なったのは、安宅商会の社員の一人が独断で手をつけた台湾米の思惑買いに失敗したため、損失額の決済に迫られていた。前年の「辰丸事件」に続いて、この時の安宅商会は、文字通り存亡の危機に直面していた。

一方、澁沢栄一の強い要請に承えて、明治四十二年四月、藤山雷太が大日本製糖株式会社取締役社長に就任している。そして、同社の経営正常化のためには、債権者との交渉と債権問題の早期合意が緊急案件となっていた。

明治四十三年九月十五日から二十六日にかけて、日本橋俱樂部において債権者会議が開催されている。『日糖六十五年史』によれば、出席した債権者は次の一〇社である。

三十四銀行、山口銀行、新潟銀行、台湾銀行、村井銀行、中井銀行、藤本ビルブローカー銀行、三井物産、鈴木商店、安宅商会

有力砂糖商である三井物産及び鈴木商店とともに債権者に名を連ねているのは、安宅商会が砂糖商としてその存在を知られるようになっていたと言えるだろう。しかしながら、資本の蓄積がまだ充分でなかった当時の安宅商会にとって、この債権をどのように回収するかが死活の問題となっていた。

紛糾した債権者会議の模様を、『日糖六十五年史』は次のように記している。

「こえて十月二十三日には最終の債権者会を開催し、右仮契約の承認を求め、ここに債権者会を完了し慰労の小宴まで予定されていたが、はからずも安宅商会安宅弥吉氏から横槍が出て、仮契約には同意し得ないと主張して譲らなかつたため、端なくも会議の進行に一頓挫を来した。しかし、各債権者は一債権のために全体の協商の不成立に終わりがねないことを憂慮して斡旋につとめた。やがては、金子直吉氏が安宅氏を別室に招いて、懇談数時に及び、安宅商会に対しては特別の協定が結ばれることになり、ようやく債権者が整理に関する契約の調印を終了して散会したのは翌二十四日午前三時であった。会議がいかに波瀾紛糾したかを物語っている」。

債権者会議における安宅弥吉の要求は、安宅商会が有する債権総額の三分の一にあたる一二万円の優先的内払いであった。

『安宅産業六十年史』の記述によれば、

「この申出は承認されなかつたばかりでなく、かえて十月二十三日開催の最終債権者会議の席上において、三四銀行頭取小山健三から侮辱に満ちた言をもって強硬に反対された。ここに至って安宅弥吉は、

「憤然として起立し『眇たる当店が一流の大銀行・大会社の諸君と共に債権者として同行することは、あたかも小児が大人と同伴するようなもので、(中略) 今後は諸君の同情にはすがらない。(中略) 今後は債権者会議とは別行動をとるが、これは自衛上やむをえない手段方法である』と宣言して退席しようとしたので満場騒然とな」

った。そして、「再び金子直吉の仲裁慰留と数時間にわたる協議の結果」、安宅商会に対する一部内払の優遇措置が認められたので、弥吉も債権者会議の決議に同意するに至った。

安宅弥吉のねばりと、金子直吉の尽力によって、なんとか手に入れた債権内払の内容は、元金のうち七万円の支払と、一部金利の優先支払である。また、横浜正金銀行に対する支払に対しても寛大な条件が認められることになり、安宅商会は再び危機を乗り切ることができた。

ところで、六三八頁に及ぶ『藤山雷太伝』（私家版 昭和十四年）にも、「対安宅氏交渉は実に債権者会榎尾の一大波瀾であった」と記されている。

更に、同書には次の一節がある。

「或時人は謠ふて曰く、

打たれても 日糖笑つて義経は 安宅の関を 無事に越しける

翁（藤山雷太——引用者）は、前後の事情を詳知せる男爵阪谷芳郎氏に之れを示した処、同男爵は左の返歌を与へられた。

ふじ山の 高きにまさる困難を 日糖笑つて よくも雷太」

上記は、義経・弁慶主従の「安宅の関」越えにひっかけた狂歌であることは言うまでもない。これほどまでに有名となった安宅弥吉の横槍ぶりは、人々のひんしゅくを買ったかもしれない。しかしながら、それほど強引さがなければ、安宅弥吉は二度にわたる経営危機を乗り切ることができなかつただろう。

(vii) 金子直吉の好意

大日本製糖の経営建て直しに際して、先ず澁沢栄一は金子直吉に社長就任を要請した。金子直吉は、当時の有力砂糖商鈴木商店の実質的な最高経営者である。しかしながら、再三にわたって金子が固辞したため、結局、藤山雷太の社長就任となった。こうした経緯もあって、金子直吉は積極的に雷太に協力した。

債権者のなかで、商社は三井物産、鈴木商店及び安宅商会の三社だけである。なかでも安宅商会の資力は他の債権者に比べると遥かに劣っていた。

創業後まだ五年を経過したばかりの小さな会社をひたすら守りぬこうとした弥吉を、他の債権者達はいささかうとましく思っていた。しかしながら、金子直吉は、安宅弥吉を熱心に説得するとともに、好意的な態度で接していた。

この時の安宅弥吉は三十六歳の壮年期にあったが、金子直吉もまた四十三歳の働き盛りであった。

こうして、安宅商会の根幹を揺るがすような経済事件をなんとか乗り切ることができたものの、弥吉は発足させたばかりの事業を整理せざるを得なかった。

明治四十二年当時の安宅商会は、海外店舗として香港支店と大連出張所を開設していた。香港支店は、安宅弥吉が貿易商として出発したゆかりの地であるが、明治も終わりの頃には、原糖取引の集散地としての地位は大幅に低下していた。明治四十二年に開設されたばかりの大連の出張所は、大豆粕、麻袋、塩など満州特産物の取扱いが中心であった。拳銃を懷中に忍ばせて満州(現在の中国東北地方)の奥地にまで出向いて特産物を買付けていたと、『安宅産業六十年史』は記している。

一方、香港に店舗を設置していなかった鈴木商店は、香港支店の開設を考えていた。こうして、大正二年五月、安宅商会は、大連出張所とともに鈴木商店に譲渡されることになった。現地における安宅商会の債権並びに債務は、いずれも鈴木商店によって肩代りされた。そして、二つの店舗の暖簾代、什器類はすべて無償で鈴木商店に提供されている。

辰丸事件そして日糖債権問題によって打撃を受けた安宅商会は、海外店舗を維持するだけの体力を失っていた。そしてまた、金子直吉の好意に報いるためにも、安宅弥吉は香港及び大連の店舗を鈴木商店に提供したとも考えられる。

(viii) 大正期における安宅商会の発展

第一次世界大戦勃発直後の大正三年八月、安宅弥吉が主唱して大阪貿易協会が設立されている。同会の発起人には、安宅商会、三井物産、日本綿花、大倉組、高田商会など大阪有力商社一〇社が参加している。この大阪貿易協会には、のちに銀行、海運会社など貿易関連企業が幅広く加盟しているが、関西財界における安宅弥吉の存在も人々に知られるようになっていった。

第一次大戦時の戦時景気及び戦後不況を経験したのち、大正八年十一月十三日、安宅商会はそれまでの個人経営から株式会社に変更している。安宅弥吉が私財を投じて安宅商会を創業した時の出資金は四万円である。一五年間の個人経営時代を経て設立された株式会社安宅商会は資本金三〇〇万円で発足し、正味資産は二〇〇万円に達していた。

個人経営時代の最後の決算となった大正八年(一九一九)十一月十二日現在の同年下期(自大正八年七月一日、至同年

十一月十二日)の「精算表」が、『安宅産業六十年史』の七三頁に記載されている。この資料に基づいて作成した取扱商品別売上高は左記の通りである(一〇〇〇円で四捨五入)。

大正八年下半期における安宅商会の商品別売上高

取扱商品	売上高(千円)	構成比(%)
輸出雑貨	二六三三	一九・六
麻袋	二二四五	一六・七
砂糖	二二〇七	一六・四
金物	二一六三	一六・一
硫安硝石	一八九三	一四・一
製紙原料	一三四一	一〇・〇
米肥	六一一	四・五
曹達灰	三五四	二・六
合計	一三四四七三三二・九八円	一〇〇・〇%

この期間における売上利益は一一万九〇九一・八八円であるが、硫安硝石及び麻袋の取扱による損失合計二五七、五九〇・九六円が計上されている。一方、砂糖の取扱による計上利益は、四万八七三三・一四円であるが、上記の損

失額を吸収した売上利益に占める比率は、四〇・九パーセントとなっている。

この時期における砂糖の取扱は、安宅商会の総売上高において、まだ重要な比率を占めていた。その後の時代の流れとともに、同社の主要取扱商品も、鉄鋼を中心とする金属及び機械類へと移行している。

ところで、明治三十四年に操業を開始した官営八幡製鉄所は、我が国近代産業の頂点に立っていた。この官営製鉄所成立当初の目的は、主として兵器用鋼材の生産にあったが、生産体制が強化されてゆくとともに、民需用の一般鋼材の販売にも力が入れられるようになった。

明治三十六年には、鋼材の民間払下げが開始されている。こうして、拡大してゆく民間需要に対応するため、関東地区では三井物産を中心に十数社の鉄鋼問屋によって「三井組」が組織された。これに対して関西地区では、大倉組を代表にして「大倉組」が結成されているが、その主力メンバーには鈴木商店、岩井商店、安宅商会などの関西系有力商社が参加している。

大正六年には、鉄鋼グループである前記の三井組及び大倉組が解散され、一般入札制が採用された。しかしながら、大正十四年には指名入札制に切換えられ、鈴木商店、三井物産、三菱商事、岩井商店、安宅商会、森岡商店、岩本商店の七社が指定された。

翌大正十五年（一九二〇）には、七社指名入札制から指定五社へと移行されるが、八幡製鉄所の製品はこれらの指定商を経由して販売されることになった。国家権力を象徴する官営八幡製鉄所の指定商に起用されることは、商社としてのステータスが確立されたことを意味しており、鉄鋼取扱商社としてのその後の発展が約束されたことになる。もっとも、八幡製鉄所との取引実績に基づいて格差が生じており、大正十五年の時点における取扱比率は左記のよう

に定められている。

鈴木商店 三三%、岩井商店 一一%、三井物産 二六%、安宅商会 九%、三菱商事 二一% (計 一〇〇%)

昭和二年(一九二七)に鈴木商店が倒産しているが、八幡製鉄所指定商も四社体制となり、取扱比率も変えられた。左記に見られるように、岩井商店と安宅商会の取扱比率が大きく増加しているが、これら二社にとっては願ってもない幸運であった。

三井物産 三三%、岩井商店 一一%、三菱商事 二七%、安宅商会 一九% (計 一〇〇%)

強大な国家権力が支配していた戦前期の日本にあつては、官営八幡製鉄所(現在の新日本製鉄の前身)の指定商に起用されることは、今日にあつては想像できないほどの権威と信用の裏付けになっていた。その後の安宅商会(昭和十八年に安宅産業株式会社に社名変更)が総合商社としての地位を確立していった背景には、八幡製鉄所指定商としてのステータスが大きく作用していた。

ところで、当初の指定商五社のうち、関西系商社の鈴木商店、岩井商店及び安宅商会は、いずれも現在では存続していない。もっとも、倒産後の鈴木商店を継承した日商株式会社、のちに岩井産業(岩井商店の後身)を合併して、日商岩井株式会社として存続している。一方、安宅産業(安宅商会の後身)は、一九七七年七月に伊藤忠商事株式会

社に吸収合併され、その姿を消してしまった。

(ix) 悲劇の予感

昭和三十六年九月の日本経済新聞に鈴木大拙は「私の履歴書」を連載しているが、「安宅君のこと」と題された一節がある。また高等商業学校に通っていた頃の弥吉は、

「わしは金持になるんだ。錢(ぜに)屋五兵衛というのが金石(かないわ)の出身で貿易をやった。わしは貿易をやって日本の国を増(ふや)すんだ」

と、帝国大学選科生であった大拙に語ったと記されている。

「錢五」と言われた江戸末期の伝説的な海運業者錢屋五兵衛は、安永二年(一七七三)に生まれている。そして丁度一〇〇年後の明治六年(一八七三)に、安宅弥吉は錢屋五兵衛の出生地である金石で生まれていた。同郷の豪商錢屋五兵衛に憧れて、弥吉は貿易商を志したと言われている。

ところで、一代で財をなした錢屋五兵衛は、のちに加賀藩のとがめを受けることになり、財産はすべて没収された。更に、五兵衛自身は、八十歳という当時としては驚くような高齢に達しながら獄死の憂き目にあっている。また、五兵衛が後継者として目をかけていた三男の要蔵は、磔刑に処せられるという悲劇に見舞われている。

この「錢屋崩し」は、幕府の追求を恐れていた加賀藩の陰謀であると言われているが、錢屋には密貿易の噂がつきまとっていた。その一つに、錢屋は薩南諸島から大量の砂糖を密輸しており、こうして手に入れた白砂糖を使って銘

菓「越之雪」を作らせていたという伝説が残されている。

錢屋五兵衛のように財を築きあげてを夢見ていた安宅弥吉は、実業家として名をなしたと言えるだろう。昭和十年には大阪商工会議所会頭、翌十一年には日本商工会議所副会頭に就任しており、十五年には勅選によって貴族院議員に選出されている。

弥吉は、昭和二十四年に七十七歳でこの世を去っている。「辰丸事件」あるいは日糖債権者問題など、創立間もない小さな貿易商の手にあまる大事件をなんとか切り抜け、その後も必死の思いで大きくしていった会社が、創立者の死後二十八年目にこの世から消え去るとは、考えてもみなかっただろう。あるいは、悲劇の海商錢屋五兵衛の末路を思い浮かべて、自分が残してゆく会社の将来に、弥吉は一抹の不安を抱いていたかもしれない。

五十八歳になった安宅弥吉が、昭和六年十二月に鈴木大拙に宛てた手紙には、

「小生が死んだ後は身代が何年持つか分かりません。遅かれ早かれ貧乏になるのは必定です」

と記されている。それであるからこそ、弥吉の援助によって大拙が出版し得た英文の仏教書について、「何んといふても本の方は何処かで永く残ると思ふ」と、弥吉は続けて記している。その生涯を通じて大拙への援助が続けられた背景には、安宅弥吉のこうした思いがあったのかもしれない。

終わりに

金子直吉の息子武蔵は、哲学者として名を成した。一方、安宅弥吉の息子英一は、会社崩壊の遠因と無縁ではなかったと考えられるが、安宅コレクションを残している。

英一氏が収集した東洋陶磁器を中心とするコレクションは、安宅産業崩壊に際して散逸することはなかった。主力銀行であった住友銀行を中心とする住友グループに所有権が移転した安宅コレクションは大阪市に寄贈され、大阪市立東洋陶磁美術館が設立された。

約一〇〇〇点に及ぶ中国・朝鮮の陶磁には国宝二点、重要文化財一二点が含まれているが、東洋陶磁のコレクションとしては、世界第一級の内容と評価されている。

一九九一年十一月から翌年七月まで、安宅コレクションはシカゴ美術館など三カ所で公開されている。そして、この稿を書き終えようとしている一九九八年七月末には、朝日新聞社などの主催によって「安宅コレクションの至宝」展が栃木県立美術館において開催された。

安宅産業は消滅したが、安宅コレクションはその評価を高めている。

(本学法学部兼任講師)